

2020年7月19日 礼拝説教要約

説教「父よ、時が来ました」

(ヨハネ福音書17章1～5節)

ヨハネ福音書は、今日から17章に入ります。

ヨハネ福音書は、これまで13章から16章までのイエス様の最後の教え・告別説教を取り上げて来ましたが、17章はイエス様の最後の祈りが記されています。

この17章の祈りは、イエス様が父なる神に執り成しの祈りを捧げられていることから「大祭司の祈り」と言われますが、17章全体は3つの部分に分けられます。

今日は、その最初の部分、1節から5節を取り上げ、十字架を前にしたイエス様の思いを深く知りたいと思います。

その祈りの最初の言葉は「父よ、時が来ました」と言う言葉です。

この「時」とは「十字架に架かる時」です。イエス様はこれまで「私の時は来ていない」とおっしゃっていましたが、いよいよ「その時が来ました」と神に語り掛けます。

ここには、イエス様の信仰、時を定めておられるのは神であると言う信仰が示されています。私たち人間は時を支配しようとします。そして、時に焦り、不安になり、絶望することがあります。しかし、旧約聖書の『コヘレトの言葉』に「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」とあるように、聖書によれば「時」を支配するのは神様なのです。

この「時」に対する姿勢に信仰が現れます。「時」を忍耐して待つこと、そして、「時」が来たらそれを見逃さずに実行することが求められます。「父よ、時が来ました」という言葉は、私たちの信仰の在り方を教えています。

それに続いて、最初の祈りが祈られます。それは「あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください」と言う祈りです。

「子」とはイエス様のことです。なぜ、イエス様は「自分に栄光を与えてください」と祈るのか。それは「あなたの栄光を現す」ためです。ではどのようにして主の栄光が現されるのか。それは「十字架に架かる」ことによってです。

イエス様は、ご自分が十字架に架かることによって神の栄光が現されると確信しておられました。しかし、十字架は栄光を現すでしょうか。十字架とは、当時、最も罪の重いものを処刑する方法でした。肉体はずたずたにされ、恥と罪と屈辱の象徴です。

ではなぜ十字架が栄光なのか。それは十字架が私たち人類の罪を赦す行為だったからです。イエス様は、人類の罪を神に赦してもらうために自らの命を捧げられたのです。そのような神からの使命を果たすことが神の栄光を現すことだったのです。

その十字架の意味について、イエス様は、こうおっしゃっています。

「あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために子は、あなたから委ねられた人すべてに永遠の命を与えることができるのです」と。つまり、私たちすべてに「永遠の命」を与えるために十字架に架かるというのです。

永遠の命とは何か。それは、イエス様によれば「唯一の神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知る」ことです。

「知る」とは、頭だけでなく、心も体も含め人格全体でつながることです。父なる神様とイエス様に人格全体で結ばれることにより永遠の命が与えられます。その命はいかなる時も愛と恵みと命を与えてくれます。その命を与えるためにイエス様は、十字架にお架かりになったのです。私たちは、イエス様からその永遠の命を受けて生かされているのです。

2020年7月19日礼拝説教抄(説教本文から)

「ヨハネ福音書の15章にこういう言葉がありました。

『わたしは、ぶどうの木。あなたがたはその枝である。わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている』と。

つまり、私達は、イエス様につながり、イエス様から愛を受け、命をいただくことによって永遠の命を生きることができるのです。私達は、イエス様によって深く愛されている。いついかなるときでも、イエス様に愛され、守られ、支えられている。そのイエス様の愛と命を受けていると心から感じた時、私達の内には、新しい命・豊かな命・永遠の命が泉のようにこんこんと湧きだしてくるのです。

さきほどの、聖書を岩手県の方言ケセン語に訳された医師山浦玄嗣さんの言葉には、こうありました。『永遠の命とは、いつでも、生き生きと、元気に力強く、明るく喜びに溢れて、ぴちぴちと生きることです』と。

永遠の命とは、どんなに辛い時や悲しい時、苦しい時でも、また、どんなに苦しい苦難と試練の中にいる時でも、イエス様の愛と命を溢れるほど受けて、元気に生き生きと力強く、明るく喜びに溢れて、ぴちぴちと輝いて生きることなのですね。そのような永遠の命を与えるために、イエス様は十字架にお架かりになったのです。あの十字架と復活の出来事を通して、永遠の命が、私たちに与えられたのです。

ご存知のように、伝道者パウロは若い頃、イエス様を信じるクリスチャンを憎み、迫害していた人ですが、復活されたイエス様に捕らえられて、やがてイエス様を救い主と信じる者に変えられ、命をかけてイエス様を伝える者に変えられていきました。

そのパウロは、ローマの手紙8章でこう書いています。

『だれがキリストの愛からわたしたちを引き離すことができますでしょうか。艱難か、苦しみか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。この世のいかなるものも、私たちの主キリスト・イエスに

よって示された、神の愛から引き離すことはできないのです』と。

それほどまでにパウロとイエス様の愛のつながり、パウロと神様の愛のつながりは、強かった。深かった。これが「知る」と言うことです。

このようにイエス様・神様の愛によって強く結ばれて生きること。これが、永遠の命なのです。そして、この永遠の命を与えるためにイエス様は十字架への向かわれたのでした。

今日、私達は、イエス様の最後の祈りを通して、イエス様がいかなる思いで十字架へと向かわれたかを知りました。イエス様は神様の栄光を現わすために十字架に向かわれ、また、私達に、永遠の命、失われることのない深き愛と命を与えるために十字架へと向かわれたのでした。

私達は、そのことをしっかりと心に深く刻み、イエス様から日々、溢れるほどの愛と命、恵みを受け、永遠の命を受けて、明るく元気に生き生きと、輝いて歩んで行きたい、そう思うのです。」